

高齢者による学校支援ボランティア活動の保護者への波及効果

世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“REPRINTS”から

フジワラ 藤原	ヨシノリ 佳典*	ワタナベ 渡辺	ナオキ 直紀*	ニシ 西	マリコ 真理子*	オオバ 大場	ヒロミ 宏美*
リ 李	サン 相	ユン 侖*	コウサ 小宇佐	ヨウコ 陽子*	ヤジマ 矢島	サトル さとる*	ヨシダ 吉田
フカヤ 深谷	タロウ 太郎*	サク 佐久間	マナオ 尚子 ^{2*}	ウチダ 内田	ハヤト 勇人 ^{3*}	シンカイ 新開	ショウジ 省二*

目的 少子高齢社会においては高齢者のボランティア活動が地域社会へもたらす多面的な波及効果が期待される。我々は平成16年6月より高齢者による児童への絵本の読み聞かせを通じた世代間交流型介入研究（REPRINTS）を継続している。すでに、高齢者ボランティアと児童への互惠効果は示されてきたが、同一の保護者集団を経時的に観察し、波及効果を検証した研究は見当たらない。今回、ボランティアが活動する小学校の保護者のボランティアに対する評価の2年間の変化を報告する。

方法 A) 保護者への調査：対象は川崎市A小学校の1～6年生の保護者368人。A校では60歳以上の“REPRINTS”ボランティア（以降、ボランティア）6～10人が週2回訪問し、主に1,2年生を対象に絵本の読み聞かせを通じた交流を継続している。6か月毎に計5回、保護者を対象に無記名・自記式調査を行った。質問項目は保護者の年齢、ボランティアに対する認知度（以降、認知度）および活動への評価（読書推進、高齢者への親近感、学校への奉仕・協力に対する保護者の物理的・心理的負担感等）である。1,2年生児童の保護者（以降、低学年保護者）、3,4年生児童の保護者（以降、中学年保護者）の回答の経時変化を二元配置分散分析により比較した。

B) 児童への調査：1～4年生の全330人を対象に記名・自記式調査を行った。読み聞かせ経験、学校内外でのあいさつの経験、ボランティアとの会話の経験を尋ね、中、低学年各々について、 χ^2 検定により、経時変化を評価した。

結果 第一回調査では保護者の年齢のみ低、中、高学年保護者間に有意差がみられた。低および中学年保護者の回答の2年間の経時変化において、「児童の高齢者への親近感」の評価は低学年保護者では変化を認めなかったが、中学年保護者で有意に低下した。「保護者の物理的負担の軽減」は、低学年保護者の評価が中学年保護者に比べて有意に高く、かつ両群とも経時的に評価は向上した。「保護者の心理的負担の軽減」および「認知度」は、両群に有意差は無く、ともに経時的に評価は向上した。一方、中学年児童の「読み聞かせの経験」と「学校内外でのあいさつの経験」が減少した。

結論 2年間のボランティア活動により、認知度とその活動の一部への評価は児童の学年を問わず高まった。児童を媒介として、高齢者と保護者世代にまたがる三世代の信頼感の構築に寄与する可能性が示唆された。

Key words：シニアボランティア、小学生、絵本の読み聞かせ、世代間交流、保護者、波及効果

* 東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム（東京都老人総合研究所社会参加とヘルスプロモーション研究チーム）

^{2*} 東京都健康長寿医療センター研究所自立促進と介護予防研究チーム

^{3*} 兵庫県立大学環境人間学部
連絡先：〒173-0015 東京都板橋区栄町35-2
東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム 藤原佳典

Ⅰ 緒 言

少子・高齢化が急速に進む今日、社会の活力と安定を確保するには、青少年育成施策、少子・高齢化対策、障害者施策などの重要課題を個別に対応するよりも、総合的に推進していくことが求められている。その基盤として世代や文化的に異質で多様な

個人が、自立し、共に理解し、認め合い、社会に参加・貢献しあう、「共生社会」の実現が提唱されている¹⁾。

一方、わが国においては、都市化や過疎化の進行に伴い、核家族化、過剰なプライバシー保護・匿名化のもとコミュニティの崩壊が危惧される。一度疎遠となった世代と世代や人々をつなぐには自然発生的でインフォーマルな交流のみでは不十分で、熟慮された「仕掛け（プログラム）」を要するとの指摘がある²⁾。

こうした社会的背景を踏まえ、筆者らは、平成16年度より厚生労働科学研究費補助金の助成を受けて、絵本の読み聞かせを主な活動とする高齢者による学校支援ボランティアを養成した。そして、これら高齢者ボランティアと児童との世代間交流による相互の効果を調べるパイロット研究“REPRINTS” (Research of Productivity by Intergenerational Sympathy) を開始した³⁾。

“REPRINTS”の第一のねらいは、地域高齢者がボランティア活動を通して社会的役割と知的能動性を賦活し、心身の健康を維持すること⁴⁾である。第二のねらいは、絵本の読み聞かせを通して児童の図書・文学への関心を高めるとともに、高齢者への敬愛の念を深めることで児童の情操教育の一助となることである。さらに、第三のねらいは、コミュニティの中核としての役割を担う公立小学校において保護者世代を含む世代間の信頼を維持・促進し、地域のソーシャル・キャピタル⁵⁾を醸成する一助となることである。ソーシャル・キャピタルとは、地域社会における協調行動を容易にする信頼、規範、ネットワークを意味する。ソーシャル・キャピタルの基本概念には、異質な者同士を結びつけるブリッジング（橋渡し）型ソーシャル・キャピタルと同質な者同士が結びつくボンディング（紐帯強化）型ソーシャル・キャピタルの区別がある。“REPRINTS”プログラムにおいては、前者は高齢者ボランティアと保護者といった異世代のつながりや生活背景は異なるが、同じボランティアプログラムの仲間同士をさし、後者はPTAや老人クラブ、町会といった地縁集団に相当する。ブリッジング型のみでは、継続性・網羅性に問題があり、ボンディング型のみでは保守的・排他的傾向に陥る可能性が危惧され、両者が補完的に醸成された環境が「住みよい」共生社会の理想と言える⁶⁾。

“REPRINTS”プログラムの第一および第二のねらいである高齢者ボランティア自身とクライアントたる子どもへの互惠の効果については筆者らが、すでに検証してきた^{3,7,8)}。一方、第三のねらいについ

ては、地域における昼間人口の大半を占める、高齢者と子育て期つまり保護者世代の信頼関係の構築なくして、総合的な地域のソーシャル・キャピタルの醸成は容易ではない。また、地域のソーシャル・キャピタルが子どもの教育成果に大きな影響をおよぼすと同時に、常にコミュニティの中核である公立小学校の充実が、地域全体のソーシャル・キャピタルを醸成すると考えられる⁶⁾。たとえば、近年の子どもを取り巻く、治安の悪化を教職員や保護者のみならず、地域全体で見守ろうとする活動の過程で、地域における絆を再構築する事例から推察されよう。

しかし、これまで、児童の保護者を対象とした研究は、学校保健や児童心理領域におけるアンケートを用いた断面調査は散見されるものの、同一の保護者集団を経時的に観察し、間接・波及効果を検証した研究は見当たらない。

本研究の目的は、“REPRINTS”プログラムが導入されている小学校において、保護者の同プログラムへの認知度や評価の変化といった波及効果を調べることにより、同プログラムが、児童を媒介として、高齢者世代と保護者世代との信頼関係の架け橋となる可能性を探ることである。

II 研究方法

対象は、平成16年10月“REPRINTS”ボランティア養成セミナー修了後、最も早く、絵本の読み聞かせによる訪問活動が開始された川崎市立A小学校である。

1. 児童への介入方法

“REPRINTS”ボランティアの活動形態は、週2日当校を訪問し、2校時と3校時の中間休み、および昼休み時間に図書室内の特設スペースで絵本の読み聞かせ会が開かれている。A校を担当する“REPRINTS”ボランティアは、あわせて7人（うち男性2人）で、年齢（平均±標準偏差）67.8±5.0歳であり、セミナー開始前の健康診査では、全員が高次生活機能において自立（老研式活動能力指標総得点^{9,10)}が13点満点）しており、認知・心理検査、体力測定および医師、保健師らの面接の結果、健康状態はボランティア活動に支障なく、「良好」と判断された。1日あたり4～6人の“REPRINTS”ボランティアが登校し、当番2～3人が児童に対面して15～30分程度の読み聞かせの実演を行い、残りの2～3人は実演の補助と記録を担当した。読み聞かせ会の開催は図書室前および内の特設掲示板および保護者向け学校便りにより周知された。読み聞かせ会への参加は原則として、全学年自由参加であるが、特に低および中学年児童に対しては、開催直前

の授業の終了時に学級担任が参加を勧奨し、同時に、実演補助を担当する“REPRINTS”ボランティアが、プラカードを持ち低中学年の教室前の廊下を歩き、参加を呼びかけた。各回とも読み聞かせ前後のボランティア間の打合せおよび実演を含めて計2時間程度、校舎内に滞在した。平成16年10月に“REPRINTS”ボランティアが活動を開始して約1か月間を試験導入と呼び、読み聞かせのリハーサル等を行った。その後、定期的な読み聞かせ活動を開始した。

2. 調査方法

A)保護者への調査：A小学校（児童数：平成16年度470人，17年度475人，18年度502人；保護者数：16年度368人，17年度370人，18年度392人）の保護者全員を対象とした。約1か月間の試験導入後、担任から児童を通して、調査票を配布し、保護者が無記名で回答した。1週間後に児童からクラス担任が回収し、教務主任を経由して都老研スタッフへと手渡された（第一回調査）。なお、無記名式アンケートとした理由は、一般に、保護者にとって、記名式アンケートの場合には、教職員の目に留まることを考慮し、社会的に望ましい回答へと偏移する可能性があるため、これらのバイアスは排除することになった。

第一回調査（平成16年11月実施）以降、6か月ごとに4回、通算5回にわたり同校の保護者を対象に同様のアンケートを行った。

質問項目は保護者の性、年齢(20-29歳，30-39歳，40-49歳，50-59歳，60歳以上の5カテゴリー)、児童の学年、当該学区内居住歴（1年未満，1-3年，4-10年，11-20年，21年以上の5カテゴリー）、「おとしより」とみなす年齢を尋ねた。高齢者に対する一般的なイメージは今井の13項目SD尺度¹⁾により評価した。SD法とは、対極にある形容語対XとYについて、いずれが高齢者のイメージとしてよりあてはまるか、「とてもX」、「どちらかといえばX」、「どちらでもない」、「どちらかといえばY」、「とてもY」の5件法で回答を求め、「とてもX」から「とてもY」まで5点から1点を与え、3点を中立点とした。各項目の得点（以下、SD得点と称する）が高いほど一般的に肯定的なイメージを表す。なお、調査票では、肯定的なイメージを表す形容語と、否定的なイメージを表す形容語が左右どちらか一方に偏らないように考慮して左右を入れ替えて配置した。なお、同SD尺度は社会性因子（5項目、得点範囲5-25点：まじめな—ふまじめな，暖かい—冷たい，信頼できる—信頼できない，礼儀正しい—無礼な，責任感のある—無責任な），活動性因子

（5項目、得点範囲5-25点：強い—弱い，頼もしい—頼りない，たくましい—弱々しい，意欲的な—無気力な，積極的な—消極的な），明朗性因子（3項目、得点範囲3-15点：陽気な—陰気な，明るい—暗い，親しみやすい—親しみにくい）の三つの下位尺度に分類される。

“REPRINTS”ボランティアによる効果に対する評価は、「子どもたちの読書・図書教育への影響」（以降、児童の読書推進への効果と称す）、「子どもたちがシニア・高齢の方を尊敬すること」（以降、児童の高齢者への尊敬と称す）、「子どもたちがシニア・高齢の方に感謝すること」（以降、児童の高齢者への感謝と称す）、「子どもたちがシニア・高齢の方に親しみを持つこと」（以降、児童の高齢者への親近感と称す）、「地域での安全・安心など町づくりへの影響」（以降、地域づくりへの波及効果と称す）、「保護者・PTAの立場から、学校支援活動についての時間や労力など物理的な負担が軽減すること」（以降、保護者の物理的負担の軽減と称す）、「保護者・PTAの立場から、学校支援活動についての責任や義務など心理的な負担が軽減すること」（以降、保護者の心理的負担の軽減と称す）の7項目を尋ねた。それぞれ5件法により「とても評価できる」、「まあまあ評価できる」、「どちらともいえない」、「あまり評価できない」、「まったく評価できない」まで5点から1点を与え、得点化した。認知度については、第二回調査以降に、「“REPRINTS”ボランティアのことが家庭で児童から話題に出る」、「REPRINTSボランティアについて知っている」（以降、認知度と称す）について得点化し、それぞれ3件法により「よくある」、「ときどきある」、「ほとんどない」まで3点から1点を与え、得点化した。

解析対象は、横断分析においては、第一回調査（平成16年11月実施）の対象である1～6年生児童の全保護者である。複数の児童を通学させている保護者の場合は、最年少児童の所属する学年の保護者として処理した。その後の経時変化の分析においては第一回調査に引き続き、第二回調査（平成17年5月実施）、第三回調査（平成17年11月実施）、第四回調査（平成18年5月実施）、および、第五回調査（平成18年11月実施）の3年度（通算5回）の反復調査が可能であった第一回調査時の1～4年生児童の保護者である。1,2年生児童の保護者を低学年保護者と呼び、3,4年生児童の保護者を中学年保護者、5,6年生児童の保護者を高学年保護者と呼ぶ。3群の回答の横断分析における、解析方法は、カテゴリー変数については χ^2 検定、連続変数については一元

配置分散分析を用いた。低学年保護者と中学年保護者の2群の回答の経時変化の分析においては、二元配置分散分析を用いて、児童の学年と調査回数による主効果および学年×調査回数の交互作用効果を評価した。その際、保護者への調査においては、保護者の年齢および学区内居住年数を調整した。

B) 児童への調査：“REPRINTS” ボランティア導入後、保護者向け第1回追跡調査～第4回追跡調査の同時期（6か月毎）に計4回行った⁷⁾。調査対象は、初回調査における1～4年生の全児童330人（1,2年生168人；3,4年生162人）とした。分析対象は第二回調査から、第四回調査までのすべてで有効回答が得られた297人（1,2年生148人；3,4年生149人、有効回答率：90.0%）であった。調査は、学級活動の時間等に自記・記名式アンケートで行い、各学級担任が質問を読み上げながら進行した。読み聞かせ経験は、毎回、「よく、絵本を読んでもらっている」、「ときどき、絵本を読んでもらっている」、「絵本を読んでもらっていない」の三択で尋ね、「よく、絵本を読んでもらっている」または「ときどき、絵本を読んでもらっている」と回答した場合を「読み聞かせ、あり」とし、「絵本を読んでもらっていない」を「読み聞かせ、なし」と定義した。学校内でのあいさつの経験、学校外でのあいさつ経験、および“REPRINTS” ボランティアとの会話の経験とともに「いつもする」または「時々する」を「あいさつ（会話）、あり」、「しない」または「機会がない」を「あいさつ（会話）、なし」と定義した。

解析は中学年、低学年児童各々について、 χ^2 検定により、経時的にみた読み聞かせ経験、学校内でのあいさつの経験、学校外でのあいさつ経験、および“REPRINTS” ボランティアとの会話の経験の多寡を評価した。本研究におけるデータの集計・分析はすべてSPSS15.0を用いた。

なお、本研究は事前に東京都老人総合研究所倫理委員会の審査で承認された。

III 研究結果

保護者への調査については、第一回調査における対象となる保護者数は低学年保護者が114人、中学年保護者が116人、高学年保護者が138人の計368人であり、回答を得た315人の保護者のうち、A小学校へ通学している子どもの数が1人のみの保護者は227人、2人の保護者は80人、3人の保護者は8人、4人以上は0人であった。各回の調査における低学年および中学年保護者の合計の応答率は第一回調査84.3%、第二回調査68.0%、第三回調査66.8%、第四回調査71.0%、第5回調査73.2%であった。

表1に第一回調査における低、中、高学年児童の保護者三群の特徴を示す。三群間で有意差がみられた項目は保護者の年齢のみであった。期待する効果で最も高かった項目は「子どもが“REPRINTS” ボランティアに対して親しみをもつこと」（三群全体で4.4点）であり、最も低かったのは「保護者の心理的負担の軽減」（三群全体で3.1点）であった。

表2に低および中学年保護者の回答の経時変化を示した。「児童の高齢者への親近感」においては、調査回数とともに低学年保護者では変化を認めなかったが、中学年保護者では有意に低下した。「保護者の物理的負担の軽減」においては、低学年保護者は中学年保護者に比べて有意に評価が高く、かつ両群とも調査回数とともに評価は向上した。「保護者の心理的負担の軽減」および「認知度」においては、両群に有意差は無く、ともに調査回数とともに評価は向上した。

「児童の読書推進への効果」、「地域づくりへの波及効果」、「“REPRINTS” ボランティアのことが家庭で児童から話題に出る」は、中学年保護者に比べて、低学年保護者の成績が高かったが、両群とも調査回数による変化はみられなかった。高齢者一般に対するイメージでは社会性因子、活動性因子、明朗性因子ともに両群に有意差は無く、調査回数の経過による変化はみられなかった。

一方、児童への調査については、「読み聞かせの経験」、および「学校内でのあいさつの経験」は中学年児童において、経時的に頻度が減少した(表3)。

IV 考 察

2年間の“REPRINTS” ボランティアの活動により、保護者の高齢者一般に対するイメージの改善までには至らなかったものの、活動の認知度とその評価の一部は高まった。

初回調査において低、中、高学年保護者すべてで、最も期待され、かつ、その後、経時的にみても低学年保護者で維持された項目は「子どもが“REPRINTS” ボランティアへの親しみをもつこと」であった。A小学校の児童の約75%は祖父母との同居経験がなかった⁷⁾。一方、A小学校区内での保護者の多くは平均居住年数が10年以下であることより、児童が乳幼児であった頃に転入してきた場合が多いと考えられる。多忙な子育て期の地域生活においては、保護者自身も、地域の高齢者と交流を持つ機会が少なかったのではないかと推察される。また、保護者が“お年寄り”であると認識する年齢が、67.4歳以上であることと、“REPRINTS” ボランティアの平均年齢が67.8歳であることを考慮すると、

表1 第一回調査における保護者の特徴および回答結果

子ども（児童）の学年		1-2年	3-4年	5-6年	合計	検定
対象保護者数, 人		114	116	138	368	
回答した保護者数, 人		95	99	121	315	
		平均値±標準偏差	平均値±標準偏差	平均値±標準偏差	平均値±標準偏差	P
回答した保護者の年齢 ¹⁾	20-29歳, %	3.6	0.0	0.0	1.6	<0.001
	30-39歳, %	65.0	47.7	23.9	50.2	
	40-49歳, %	31.4	51.4	71.6	47.0	
	50-59歳, %	0.0	0.0	1.5	0.3	
	60歳以上, %	0.0	0.9	3.0	1.0	
回答した保護者の同学区居住年数 ²⁾	1年未満, %	6.6	2.8	4.5	4.8	n.s.
	1-3年, %	21.3	16.5	13.4	17.9	
	4-10年, %	48.5	47.7	40.3	46.5	
	11-20年, %	16.2	26.6	34.3	23.7	
	21年以上, %	7.4	6.4	7.5	7.1	
お年寄りと思う年齢 ³⁾		67.4±4.6	67.4±4.8	67.3±4.9	67.4±4.7	n.s.
SD 下位尺度 ⁴⁾ —社会性因子		18.9±3.2	19.1±2.8	19.0±2.7	19.0±2.9	n.s.
—活動性因子		15.7±2.5	15.4±2.4	15.8±2.7	15.6±2.5	n.s.
—明朗性因子		10.2±1.8	9.7±1.7	9.8±1.6	9.9±1.7	n.s.
期待する効果 ⁵⁾ —児童の読書推進への効果		4.2±0.7	4.1±0.7	4.1±0.7	4.2±0.7	n.s.
—児童の高齢者への尊敬		4.1±0.8	4.2±0.7	4.0±0.7	4.1±0.7	n.s.
—児童の高齢者への感謝		4.3±0.6	4.3±0.7	4.2±0.7	4.3±0.7	n.s.
—児童の高齢者への親近感		4.5±0.6	4.4±0.6	4.3±0.7	4.4±0.6	n.s.
—地域づくりへの波及効果		4.1±0.8	4.0±0.8	4.1±0.7	4.1±0.8	n.s.
—保護者の物理的負担の軽減		3.3±0.9	3.1±0.9	3.1±0.9	3.2±0.9	n.s.
—保護者の心理的負担の軽減		3.1±0.9	3.0±0.9	3.0±0.8	3.1±0.9	n.s.

有意差検定：カテゴリー変数^{1,2)}については χ^2 検定；連続変数^{3~5)}については一元配置分散分析を用いた。^{4,5)}の諸得点については、得点が高いほど成績が良好。

保護者は、“REPRINTS” ボランティアに対して“お年寄り”像を投影している可能性がある。児童が日頃、接する機会が少ない“お年寄り”との交流を“REPRINTS” ボランティアに対して求めており、尊敬や感謝といった道徳的な感情を伴う偉大な“お年寄り”像よりもむしろ、保護者世代が幼少期に祖父母や近隣の高齢者など身近な“お年寄り”に対して抱いた親近感を感じて欲しいと期待しているのかもしれない。特に、低学年児童においては、中高学年児童に比べて、絵本の読み聞かせを通して、“REPRINTS” ボランティアと交流する機会が多く、低学年保護者において児童が親近感を持つことへの評価が持続した可能性がある。さらに、読み聞かせに期待される直接的な効果としての、子どもの活字離れを抑制したり、聴く力や想像力を養うといった、読書推進や図書教育¹²⁾また、子どもをねらった犯罪への不安の強い低学年児童の保護者ゆえに、面識のある高齢者が身近に増えることにより、見守りの一助になるのではとの思いから防犯・見守りな

ど地域づくりへの波及効果についての評価が現れたとも考えられる。

「保護者の物理的および心理的負担の軽減」において、低、中学年保護者ともに調査回数の主効果に有意差がみられ、経時的に負担感の軽減効果が高まった。A小学校では、元来、ボランティア・コーディネーターが配置され、一部の保護者や地域住民によるボランティア活動は盛んであるが、“読み聞かせボランティア”を一般の保護者に対して募集することはなかった。しかし、多忙な現役世代の保護者にとって、一般に、PTA活動や学校への奉仕・協力は時間的に必ずしも容易ではない。とくに、今日、共働き家庭の一般化により、就労のために平日昼間の学校行事への協力依頼に、十分対応できず、一部の保護者に委ねることに対する、不公平感や後ろめたさは潜在する。

“REPRINTS”研究がモデルとした米国の高齢者ボランティアによる学校支援プログラム「Experience Corps」においては、高齢者ボランティア

表2 低および中学年保護者の高齢者イメージおよび“REPRINTS”ボランティアに対する評価の経時変化

第一回調査時の子ども (児童)の学年		低 学 年 (1-2年生)					中 学 年 (2-4年生)					主効果 ¹⁾		交互作用 ²⁾
		第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	学年	調査回数	学年× 調査回数
対象保護者数, 人		114	111	113	112	112	116	117	119	119	119			
回答した保護者数, 人		95	75	71	88	73	99	80	84	76	96	有意差	有意差	有意差
SD 位下位尺度 ³⁾ —社会性因子	平均値	18.8	19.1	18.8	19.1	18.8	19.2	18.9	19.2	19.0	18.3	n.s.	n.s.	n.s.
	標準偏差	3.2	2.4	2.4	2.4	2.8	2.8	2.7	2.2	2.5	2.5			
—活動性因子	平均値	15.6	15.6	15.6	15.7	15.8	15.2	15.6	15.9	16.0	15.6	n.s.	n.s.	n.s.
	標準偏差	2.5	2.1	2.4	2.7	2.6	2.4	2.5	2.1	2.5	2.2			
—明朗性因子	平均値	10.1	10.1	9.9	10.1	9.9	9.6	9.6	10.0	9.9	9.8	n.s.	n.s.	n.s.
	標準偏差	1.9	1.4	1.4	1.5	1.4	1.7	1.4	1.4	1.4	1.3			
評価 ⁴⁾ —児童の読書推進への効果	平均値	4.2	4.2	4.2	4.2	4.3	4.1	4.2	4.0	3.9	3.9	0.001	n.s.	n.s.
	標準偏差	0.7	0.7	0.8	0.7	0.7	0.7	0.6	0.8	0.8	0.8			
—児童の高齢者への尊敬	平均値	4.1	4.3	4.2	4.1	4.2	4.2	4.2	4.0	4.0	4.0	n.s.	n.s.	n.s.
	標準偏差	0.8	0.7	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6	0.7	0.6	0.6			
—児童の高齢者への感謝	平均値	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	4.4	4.3	4.2	4.2	4.0	n.s.	n.s.	n.s.
	標準偏差	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6			
—児童の高齢者への親近感	平均値	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	4.4	4.3	4.2	4.2	4.0	n.s.	<0.001	n.s.
	標準偏差	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6			
—地域づくりへの波及効果	平均値	4.2	4.4	4.3	4.3	4.3	4.1	4.1	4.3	4.1	4.0	<0.001	n.s.	n.s.
	標準偏差	0.8	0.7	0.7	0.7	0.7	0.8	0.9	0.7	0.7	0.8			
—保護者の物理的負担の軽減	平均値	3.3	3.6	3.9	3.9	4.0	3.2	3.5	3.7	3.8	3.7	0.031	<0.001	n.s.
	標準偏差	0.9	0.9	1.0	0.8	0.9	0.9	0.7	0.9	0.9	1.0			
—保護者の心理的負担の軽減	平均値	3.2	3.4	3.7	3.7	3.8	3.0	3.3	3.6	3.6	3.6	n.s.	<0.001	n.s.
	標準偏差	1.0	0.9	0.9	0.9	0.8	1.0	0.8	1.0	1.0	0.9			
—“REPRINTS”ボランティアのことが話題に出る	平均値	—	0.8	0.7	0.8	0.7	—	0.7	0.4	0.3	0.4	<0.001	n.s.	n.s.
	標準偏差	—	0.6	0.6	0.6	0.6	—	0.6	0.5	0.5	0.6			
—“REPRINTS”ボランティアについて知っている	平均値	0.6	0.8	0.9	1.0	1.0	0.6	0.9	0.9	0.9	0.8	n.s.	<0.001	n.s.
	標準偏差	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.3	0.5			

^{1,2)} 1, 2年生児童(低学年)の保護者と3, 4年生児童(中学年)の保護者の2群の回答の経時変化を二元配置分散分析により評価した(保護者の年齢, 学区内居住年数を調整済)。^{3,4)}の諸得点は, 得点が高いほど成績が良好。

表3 低学年児童および中学年児童の“REPRINTS”ボランティアとの交流の経時変化

回答した児童の学年		低 学 年 (1-2年生)					中 学 年 (3-4年生)				
		第二回調査	第三回調査	第四回調査	第五回調査	検定 ¹⁾	第二回調査	第三回調査	第四回調査	第五回調査	検定 ²⁾
回答した児童数	人	154	152	150	148	<i>P</i>	152	155	152	149	<i>P</i>
読み聞かせあり	%	71.5	79.6	76.7	69.6	n.s.	49.3	49.0	44.1	35.6	0.024
校内であいさつあり	%	71.2	67.1	65.3	60.1	n.s.	70.2	63.8	61.8	53.0	0.009
校外であいさつあり	%	32.7	33.8	30.6	34.5	n.s.	27.0	29.6	26.3	20.2	n.s.
会話あり	%	61.4	61.0	58.4	52.4	n.s.	48.7	47.1	45.4	38.9	n.s.

^{1,2)} 1, 2年生児童および3, 4年生児童の2群の回答の経時変化を χ^2 検定により評価した。

の関与により, それまで, 非協力的であった保護者の学校行事への協力・参画が促進されたと報告されている¹³⁾。また, わが国でも, 学級崩壊を経験した保護者において, スクールソーシャルワーカー等外部の仲介役が導入されることにより, 保護者の学校行事への協力や学校が抱える諸問題への参画が促進

されることが示されている¹⁴⁾。

本アンケートの自由回答欄においては, 多くに, “REPRINTS”ボランティアへの感謝や激励の意が表されていた。学校側によると, 学校が行う, 授業や学校運営に関する重要事項についての単回の記名式アンケート調査においてさえ, 回収率は50%前後と

のことであり、本調査の回収率が70%前後であったことを合わせると、保護者は“REPRINTS”プログラムに対して、関心が高く、また、概して肯定的・好意的であることが示唆された。“REPRINTS”ボランティアの導入後、時間の経過とともに、児童からの口コミ、「学校だより」、運動会や卒業式といった学校行事への“REPRINTS”ボランティアの招待等により保護者へ紹介され、本事業への理解が促されたものと考えられる¹⁵⁾。

2年間にわたり、同一の児童の保護者集団を経時的に観察した結果、読み聞かせを通じたボランティアとの交流頻度が少ない、中学年児童の保護者においても、“REPRINTS”ボランティアに対する認知度や評価の一部は有意に向上した。児童への調査によると、児童と“REPRINTS”ボランティアの交流において、読み聞かせの機会や校内でのあいさつの機会は中学年において経時的に減少した。学年が進むにつれて教科の学習カリキュラムが密になることや、委員会活動やクラブ活動といった課外活動の占めるウエイトが増えたため、交流頻度の減少はやむを得ない。しかし、保護者への調査から、“REPRINTS”ボランティアについて、児童から話題に出る頻度については、中学年において減少傾向がみられるものの、低中学年いずれも経時的に有意な変化はなかった。直接的な交流頻度が減少しても、学校内での“REPRINTS”ボランティアの存在が定着してきたとも推察できる。

一方で、保護者の高齢者一般に対するイメージの改善までには至らなかった理由として、“REPRINTS”プログラムが通常の学校カリキュラムの中で行われているため、“REPRINTS”ボランティアが読み聞かせを通じて、児童と交流している現場を保護者が見ることは殆どなく、挨拶や会話といった直接、コミュニケーションをとる機会がまれであったためと考えられる。

本結果について、教職員と打合せを行ったところ、今後、学校公開日において、ボランティアが読み聞かせを行っている現場を保護者に公開できるよう工夫してみようとの回答を得、今後の保護者の評価が期待される。

保護者の認識は、わが子の成長・教育を支援するボランティアへの好評・感謝という段階で留まってはいるものの、“REPRINTS”プログラムが、児童を媒介とした波及効果により、高齢者と保護者世代にまたがる三世代の相互理解・信頼に寄与しうることが示唆された。今後は、本研究で対象となったA小学校における本世代間交流事業のもたらす保護者への波及効果が、地域全体の暮らしやすさにおよぼ

す影響について、当該学区とそれ以外の小学校区での地域共生意識やソーシャル・キャピタル¹⁶⁾の差異をアウトカムとして検討していきたい。

本研究は厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業 H16-長寿-031「高齢者の社会参加・社会貢献の増進に向けた介入研究」（主任研究者新開省二）および第3回勸博報児童教育振興会ことばと教育研究助成「世代間交流型読み聞かせ：コミュニケーション能力向上プログラム」（研究代表者 藤原佳典）の一環として行われた。本研究の実施に際し、多大なるご協力をいただいた、木村俊彦（前川崎市立下布田小学校）、新垣英一、鈴木幹男（元同小学校）、熊谷裕紀子（同小学校教育ボランティア・コーディネーター）、富澤美奈子、池上洋美、河北朋子（多摩区役所保健福祉センター）の各氏に厚くお礼申し上げる。

（受付 2008.10.27）
（採用 2010. 2. 8）

文 献

- 1) 共生社会形成促進のための政策研究会。「共に生きる新たな結び合い」の提唱. 内閣府, 2005.
- 2) 杉岡(矢島)さとる, 倉岡正高. 今, なぜ世代間交流なのか. 社会教育 2006; 61(3): 30-33.
- 3) 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム: “REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果. 日本公衆衛生雑誌 2006; 53: 702-714.
- 4) Fujiwara Y, Shinkai S, Kumagai S, et al. Longitudinal changes in higher-level functional capacity of an older population living in a Japanese urban community. Arch Gerontol Geriatr 2003; 36: 141-153.
- 5) 湯浅資之, 西田美佐, 中原俊隆. ソーシャル・キャピタル概念のヘルスプロモーション活動への導入に関する検討. 日本公衆衛生雑誌 2006; 53: 465-470.
- 6) 稲葉陽二. ソーシャル・キャピタル: 「信頼の絆」で解く現代経済・社会の諸課題. 東京: 生産性出版, 2007.
- 7) Fujiwara Y, Sakuma N, Ohba H, et al. REPRINTS: Effects of an intergenerational health promotion program for older adults in Japan. Journal of Intergenerational Relationships 2009; 7: 17-39.
- 8) 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 他. 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因: “REPRINTS”高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から. 日本公衆衛生雑誌 2007; 54: 615-625.
- 9) 古谷野亘, 柴田 博, 中里克治, 他. 地域老人における活動能力の測定—老研式活動能力指標の開発. 日本公衆衛生雑誌 1987; 34: 109-114.
- 10) 藤原佳典, 新開省二, 天野秀紀, 他. 自立高齢者における老研式活動能力指標得点の変動. 日本公衆衛生雑誌 2003; 50: 360-367.
- 11) 今井芳昭. 第14章大学生の高齢者に対する世代観. 高齢化社会の世代間交流. 東京: 財団法人長寿社会開

- 発センター, 1994; 430-449.
- 12) 世代間交流プロジェクト・りぷりんと・ネットワーク, 編著. 藤原佳典, 監修. 子どもとシニアが元気になる絵本の読み聞かせガイド. 東京: ライフ出版, 2008.
 - 13) Glass TA, Freedman M, Carlson MC, et al. Experience Corps: design of an intergenerational program to boost social capital and promote the health of an aging society. *Journal of Urban Health* 2004; 81: 94-105.
 - 14) 大塚美和子. スクールソーシャルワーク実践モデルの構築に関する研究: 「学級崩壊」を経験した保護者への仲介モデルの検証. *厚生指標* 2005; 52(11): 1-6.
 - 15) 武藤孝司, 福渡 靖. 第4章評価の信頼性と妥当性. 武藤孝司, 福渡 靖, 著. 健康教育・ヘルスプロモーションの評価. 東京: 篠原出版, 1994; 31-46.
 - 16) 大賀英史, 稲葉陽二, 藤原佳典. ソーシャル・キャピタルの可能性 (鼎談). *公衆衛生情報* 2007; 37: 6-20.
-

Indirect effects of school volunteering by senior citizens on parents through the “REPRINTS” intergenerational health promotion program

Yoshinori FUJIWARA*, Naoki WATANABE*, Mariko NISHI*, Hiromi OHBA*,
Sangyoon LEE*, Youko KOUSA*, Satoru YAJIMA*, Hiroto YOSHIDA*,
Taro FUKAYA*, Naoko SAKUMA^{2*}, Hayato UCHIDA^{3*} and Shoji SHINKAI*

Key words : Senior volunteer, Elementary school, Reading picture books, Intergenerational relationships, Parents, Indirect effects

Background and Purpose We have launched a new intervention study, called “REPRINTS” (Research of productivity by intergenerational sympathy), in which senior volunteers aged 60 years and over are engaged in reading picture books to school children, regularly visiting public elementary schools since 2004.

So far, no repeated cross-sectional studies to demonstrate indirect effects on parents have been reported, although reciprocal effects on senior volunteers and children have been demonstrated. The purpose of this study was to examine the changes of evaluation of “REPRINTS” program by parents of school children during the 2 years.

Methods Subjects & setting: Four to six volunteers as a group visited an elementary school in a suburb of Kawasaki city twice a week to read picture books. A baseline survey was conducted one month after launching the volunteer activity. First to fourth follow-up surveys were conducted every 6 months after baseline survey.

Of 368 parents, 230 whose children were in 1st-4th grade were analyzed. Measurements: School grade of children, gender, emotional image scale of older adults by the SD (Semantic Differential) method (13 items), parents' evaluation of activity of “REPRINTS” volunteers such as promotion of reading for children, or children's respect for older adults, appreciation, familiarity with older adults, indirect effects on promotion of safety in the community, and reducing parent's physical and psychological burdens of volunteer service for school. Repeated cross-sectional analyses by ANCOVA, adjusted for confounding factors, were conducted in order to compare changes in responses between parents of 1st-2nd grade children (lower-grade children) with those of 3rd-4th grade-children (middle-grade children).

We examined experiences of being read with picture books, greeting and having conversations with volunteers among all of 330 students of 1st-4th grade. These three items were examined using Chi-squared test to compare longitudinal change between parents of lower-grade and middle-grade children.

Result Evaluation of children's familiarity with older adults significantly declined among parents of middle-grade children, but was maintained among those of lower-grade children during the 2 years. Physical burdens of volunteer service for school were lower among parents' of lower-grade children at baseline, and were significantly reduced among parents' of all grades.

Promotion of reading for children, indirect effects on promotion of safety in the community, and frequency of hearing episodes of “REPRINTS” volunteers from children were higher among parents' of lower-grade children at baseline. Psychological burdens were reduced and level of knowledge of “REPRINTS” volunteers was increased among parents' of all grades.

In terms of parents' emotional image scale of older adults in general, no significant difference was found among the grades of school children and number of surveys for all the subscales of ‘socialization’, ‘activity’, and ‘cheerfulness’.

Conclusion The level of knowledge and a number of items of evaluation of “REPRINTS” volunteers were significantly increased among parents of both lower-grade and middle-grade children during the 2-year intervention. This study indicates that the “REPRINTS” program can contribute to establishing trust and reliance between generations of older adults and parents of school children with the children as mediators.

* Research Team for Social Participation and Health Promotion, Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology

^{2*} Research Team for Promoting Independence of the Elderly, Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology

^{3*} School of Human Science and Environment, University of Hyogo